

「牛と人とこの地域と」

広島県 萬福寺 住職 高橋 道英

平成二十五年、お寺の近くに若い夫婦が移住してきました。牛を飼い、チーズを作って生  
活しています。若い夫婦が目指すのは、自然循環型の酪農です。牛が野山の草を食む。そ  
の牛の乳を人が分けてもらい、それまで荒れていた野山も整備されていく。まさに、牛と人  
と自然とが一体となった暮らしなのです。そして、色々な職業や生き方の人達が、互いに  
支え合う暮らしを願っています。そんな暮らしのできる場所を探し求め若い夫婦がたどり  
着いたのは、福島県いわき市でした。夫婦は地域の人達の協力も得ながら、その広い土地  
を牧場として整備していきました。夢に向かって一歩ずつ歩んでいたのです。

しかしその暮らしは、平成二十三年三月十一日を境に一変しました。東日本大震災。東京  
電力福島第一原子力発電所の事故により、いわき市での牛の放牧はできなくなったのです。  
野山の草の代わりに飼料を使えば、酪農を続けることも可能でした。しかし「安心して食  
べることができる物を作りたい」という思いで、若い夫婦は新たな土地を探し始めました。  
そして様々な縁で決まった新しい移住先が、庄原市口和町だったのです。地域の人達は、  
若い夫婦と牛たちのために土地を準備し、家を準備し、快く迎え入れてくれました。それ  
から十年、夫婦は三人の子どもを授かり、今では地域にとって欠かすことのできない存在  
となっています。

大本山総持寺を開かれた瑩山けいざんぜんじ禅師は、「たとい、難値難遇なんちなんぐうの事有るも、必ず和合和睦わごうわぼくの思  
いを生ずべし」と示されています。それは「きわめて困難なことに遭遇したとしても、必ず  
親しみ、睦み合う思いを起しなさい」という意味です。

東日本大震災は、この夫婦にとって大きな苦難でした。また私達にとっても、とても大きな  
悲しい出来事でした。原発事故以来「フクシマ」というだけで多くの人が誹謗中傷を受け、  
心ない言葉をむけられてきました。そんな時に口和町の人達は、福島からの若い夫婦を快  
く迎えいれました。これこそ瑩山禅師の思いの実践なのです。

分かち合い、支え合い、思いを重ね合って、人と人との繋がりを深めていく、これを仏教で  
は「同事」といいます。そして、この夫婦の理想とする、  
自然と私たち人間とが共に生きる、これこそが大いなる「同事」の生き方なのです。